

キルギス便り ～青年海外協力隊ボランティアとしてキルギスで活動してみて考えたこと～

大藪 瑞穂
(海外青年協力隊)

キルギスに来て早くも8ヵ月が経とうとしている。あれだけ恐れていた-20℃という世界もこんなものかという感じで毎日淡々と月日が流れていく。

私は今、青年海外協力隊（JICA）として、「キルギス」という国で活動をしている。首都からマルシュと呼ばれる乗合いのミニバスに乗って約6時間のところにある、チュップ村という小さな村の障がい児のためのリハビリセンターで働いている。

「キルギス」という中央アジアの小さな国を知っている人は日本でも少ないのではないだろうか。私も「キルギス」という国に派遣されることが決まるまでこの国のことをほとんど知らないでいた。「羊と遊牧の国」そんなイメージをかすかに持っていただけである。JICAからのボランティア合格通知で派遣先がキルギスだと知らされ、キルギスという国を家族と地図上で確認した時、母は「なぜこんなところに我が娘を行かせなければならないのか」といって泣いた。それくらい、キルギスは日本では馴染のない国なのだろう。

首都ビシュケクは「ここは本当に発展途上国なのだろうか」と疑問に思ってしまうほど都会である。カフェ、デパート、映画館、なんでもある。しかし、一度村に入れば牛、羊、馬、ロバ、鶏が道のそこらじゅうを歩いている。水道はほとんど通っておらず、生活用水は井戸に汲みにいく。トイレは外にあり、穴があけてあるだけである。仕切りはあるが、-20℃にもなると正直隙間風が辛い。トイレトペーパーはかろうじてあるが、紙がなくなると、使用済みの数式やアルファベットが書かれたノートがそっと傍らに置いてあることもある。お風呂は当然なく、代わりにモンチョとよばれるサウナのようなものを毎週末に焚く。モンチョのない家はモンチョのある家に家族総出で入りに行く。週に一度ではさすがに頭がかゆくなるので週に2回やかんを使って頭を洗う。毎日おなじ服を着る。そんなことにもいつの間にか慣れてしまった。

しかし、ここでは生活に必要なものは全て自分たちでつくる。パンは自分で焼き、ミルクは朝牛から搾る。じゃがいもがなくなれば庭から取りに行き、庭になるイチゴやラズベリーからジャムをつくる。おなかがすけば庭になったリンゴをもいで食べ、肉がなくなれば家畜をつぶして肉にする。全てスーパーマーケットで買う日本に比べれば、ここの人たちはみんな丁寧に、丁寧に生活をす



る。日本では現在、スローライフがブームになっている。しかし、ここでは毎日がスローライフである。牛が道を通れば車や人は待たなければならない。水がとまれば出るまで待つ。電気がなければ仕方がない。そんな毎日である。

キルギスは「お客をもてなす文化」である。たくさんのお客さんがくれば、家族にたくさんの幸せが来るという文化である。そのため見知らぬ人であったとしても「お茶を飲んでいってください」と気軽に



に人々を家に招き入れ、もてなす。私も、「日本から来た」というだけで、道端で出会った多くの人々の家に招いてもらい、お茶やご飯をたくさん御馳走になった。テーブルいっぱいになりばめられた食べ物は尽きることがない。こういう生活が本当の意味で裕福なのかもしれない、と思わず思ってしまう。中央アジアのキルギスという小国は本当に裕福な国であると思う。

そんな国に来て8ヵ月。赴任期間の2年なんてアツという間、という人も多いが、私にとってこの8ヵ月が短かったかという嘘になる。振り返れば早かったが、長い長い日々であったように思う。多くの事に戸惑い、何度も何度も日本に帰りたくなった。ほんの8ヵ月という間に、小さな小さな村で暮らす私は、多くの多くの人に出会った。関われば関わるほど人に傷つけられ、人を傷つけた。思えば嬉しかったことはほんの数パーセントに過ぎない。それでもその数パーセントの幸せが私をこの地になんとかとどまらせてくれている。

そもそもなぜ私がこの地に来たのか、偶然性なのか必然性なのか今の私にはまだわからない。しかし、きっかけは日本で教壇に立ち、社会科を生徒に教える中にあった。私は社会科の教師として世界で問題とされている貧困、戦争といった社会問題を生徒と一緒に考えていける授業づくりを心掛けてきたつもりである。しかし、そういう授業をつくれればつくるほど自分が実際に見てもいない、「貧困」や「社会問題」を生徒と「解決しなければいけない世界の問題」として授業で取り上げ、考えることに疑問を感じ始めていた。見てもいないことをさも知っているかの様に教えることができるのか、じゃあ実際にこの目で確かめてみればいいではないか、という幼稚な理由が、青年海外協力隊として活動してみたいと思ったきっかけである。そんな小さなきっかけが日本で高校の地歴の教師を目指していた私を何かの縁で、キルギスの小さな村の障がい児のリハビリセンターの教師へと導いた。特別支援教育に関わったこともない、ラテンアメリカを対象に研究をしてきた私が、中央アジアの小国で特別支援の教師として働くことになろうとは自分では想像もつかない出来事であった。

キルギスで障がいを持つことは「恥」とされる。遊牧民の国で血縁関係の強いコミュニティの中、「障がい」は先祖が悪い行いをしたからだと考える人も多い。そのため、環境は今日大分変わってきているとはいえものの、障がいを持って生まれると、家に閉じ込められたり、外にだしてくれないというケースも少なくはない。また、通常学級では教師が面倒をみきれない、ということを経験し、車を必要とする障がい児は学校に行くことができない。そういった学校にいけない子ども達を通常では私たちのセ

ンターで教育の機会を与える必要があるものの、送迎バスもないなか、舗装されていない道を母親が毎日車いすで子ども達をセンターに連れてくることは想像以上に厳しいといえる。チュップ村で学校に通えない在宅障がい児は約30人。その中でセンターの利用者は2、3人である。その利用者の数からも発展途上国の小さな村で障がい児が教育を受けるのがどれだけ難しいのかと言う現状が見えてくる。

赴任して2、3か月。言語の壁もあり、センターの方針もわからず、子ども達の障がい状況もわからない状況下で、先生がセンターへ通ってくる生徒に授業をするわけでもなく、朝から夕方まで子ども達を大人しく座らせる状況を前に成す術もなく、悶々とした日々をおくっていた。何をしたいかが分からずただセンターに通っていた中、金銭的余裕がなく、暖房器具がないセンターは12月から3月という長い冬休み休暇に入った。ボランティア



アの特権としてキルギス国内の旅行や周辺国の旅行をすることもできたが、この際だからと思い、センター長に頼み、学校にもセンターにも通えていない在宅障がい児の家を巡回教育することにした。この巡回教育で、村の障がい児の置かれる状況を目の当たりにすることとなった。

障がい児を抱える家庭は多くが金銭的に厳しい状況に置かれている。日本であればどんな重い障害を持っている子どもでも学校に通うことができる。学校に子ども達を預けている間、親は仕事をしに外にでることができる。しかし、ここでは障がい児を持つ親（多くは母親）は、子ども達を日中預ける場がないため、外にでて働くことができない。また、キルギスでは多くの場合それが知的障害であっても、身体障害であっても薬で障害を治そうとする傾向がある。その薬を買うお金は決して安くはなく、薬代がいるのにも関わらず仕事をするのができないため、お金が足りなくなる。また、朝から晩まで外に出ることができず子どもの面倒をみる母親は外の世界から孤立しがちである。日本でも状況は同じかもしれないが「私が死んだらこの子はどうなるのか」ということを誰に相談できるわけでもなく母親は一日中考え続ける。子ども達も友達を作ることもできず、朝から晩まで母親と過ごさなければならない。障がい児を抱える家庭は内に内に閉じていってしまう。それが小さな村で障がい児を抱える家庭の現状であった。

私は特別支援に関わってきたわけではなく、作業療法士や理学療法士でもない。子ども達にリハビリもできなければ、適切な教育を考えてあげることもできない。私は子ども達の家に行ってた、パソコンやスマートフォンといった日本の最新器具を子ども達に見せ、家々でお茶を飲んだり、お昼ご飯を御馳走になりながら親と話すだけである。私はだんだんと自分のやっていることが恥ずかしくなってきた。子ども達やその親たちに何をしてあげることも、何の役にたつこともできないのに、座ってお茶だけを飲んで帰っていく自分と言う存在に腹が立った。私という存在はここでは不必要なのではないかと、巡回することが嫌になり、子ども達や保護者と関わるのが怖くなり、家に向かう途上で何度も足が止まったことがある。そして自分はいったいここで何をしているのかと考え続けた。

それでも私が巡回を続けているのは子ども達や保護者が私を待っているからである。ただお茶を飲ん

でご飯を食べて帰っていく私が行かないと子ども達は泣き、親から電話がかかってくる。巡回の曜日に行かなければなぜ来なかったのかと親たちから怒られる。どうやったらキルギスに残るのかと聞く保護者に「良い男をみつけたら」と冗談をいった私に本当に男の人を探して紹介してくる。「ミズホ、キルギスに残って」と言う言葉は社交辞令だと思っていた。でも、親や子ども達は私がここに残る術があるのであればなんでもしようとするのである。「なんで、私何もしないのに。私何もできてない。ただお茶だけのんで帰っていただけだし…。」という私の言葉に親たちは「子どもや私たちはあなたが好きだから。それでいい」と言う。

キルギスの村で「障害」を持つことは「恥」であり、障がい児を抱える家庭は外の世界から孤立し、内に内に閉じていく。そんな子ども達や親に今までわざわざ会いにくる存在がいなかったのだろう。自分たちに会いに来てくれる存在ができただけで十分だというのだ。「あなたがいてくれるだけでいい」そう言ってもらえた。そんな子ども達や親と接する中で、私は自分自身が大きな勘違いをしていたことに気づかされた。

人間の究極の幸せは「愛されること」、「褒められること」、「役に立つこと」そして「人に必要とされること」の4つだという。日本では無条件に親からこの4つの条件の全てを満たしてもらっていた私は、キルギスに来てこの4つの条件の中のひとつたりとも感じる事ができなかった。だからこそ、何度もこの地でしんどくなり、日本に帰りたと思った。しかし、何かをしに、人の役に立ちに来た「私」という存在はいつのまにか周りの人々に支えられ、気がつけば私が助けられていた。私が必要とされているのではなく、いつのまにか私が彼等を必要としていた。

私は「貧困」や「社会問題」を実際にこの目で確かめたくてボランティアとしてこの地にやってきた。そんな思いをもって「先進国」からやってきた私はいつのまにか「発展途上国」に住む「かわいそうな人」を探していたことに気づいた。現地に行けば当然「かわいそうな人」や「かわいそうな状況」が待ち受けているのだと勘違いしていた。しかし、キルギスにやってきて「かわいそう」にさせられるはずだった存在は普通に生き、「先進国」と呼ばれる国に住む私たちとなんら変わりなく、「幸福に生きたい」という想いを胸に毎日を必死に生きていた。

日本の社会科学研究の世界では今、グローバル社会を生き抜くためのスキルを身に付けさせるための授業づくりが主流となってきた。私も子ども達がこれから生きていく社会の中のあらゆる問題と対峙していけるようなスキルを身に付けるための授業づくりを心掛けていた。世界には「貧困」「戦争」といった「解決しなければいけない問題」が山積みという前提を持ってである。

しかし、実際にその「問題を抱える」舞台となる発展途上国に来てみて、そこに住む人々と関わる中で、貧困や問題を抱えるとされる国の人々があまりにも普通に生活をし、生きているという当たり前の事実気づかされることになった。日本でも、キルギスでも、障害を持っていなくても、持っていたとしても同じであった。だれもが幸福に生きたいと思い、「褒められたい」、「役に立ちたい」、「人に必要とされたい」そして「愛されたい」と思っていた。

大学の学生時代に尊敬する教授から言われたことがある。「結局のところ、一番大事なのは愛なんですよね。世界は愛なんですよ。」と…。その当時私は教授のこの言葉を良く理解することができなかった。

でも今、キルギスという国で生活してみて、ようやくこの言葉を理解することができたような気がする。我が子の為に私にキルギスに残ってほしいと思うのは子ども達に対する親の愛であり、子ども達に幸せに生活してほしいという想いが親たちを動かしていた。世界で起きている生活を守るための労働者のデモ活動、戦争にいたっても自分の大切な人を守りたい、幸福な人生を送りたいというひとつの「愛の形」なのではないかということにここにきて気づかされた。

もし、今日本に帰って私が地歴の教師として教壇に立つのであれば、私は自分がキルギスで見てきた現状や面白いストーリーを伝えるよりも、子ども達に「いてくれるだけでいい」と伝えたい。キルギスの人々が私にそうして私をここにとどまらせてくれているように、私も子ども達にそう伝えたいと思う。

キルギスに来て8ヵ月。正直なところ毎日のように人々に対していら立ちを覚え、自分の活動にも焦りを感じる。腹が立つこと、悔しいこと、つらいことはたくさんある。しかし、私はこの人たちが大好きである。キルギスに初めて足を踏み入れた時、私はこの国が愛せるかと不安になった。でも今私はこの国を愛している。この人たちのことを大好きでいる以上、私は与えられた期間、日本に帰らずここでこの人々とともにただ「生きたい」と思っている。

キルギスの小さな村で教育の機会を与えられていない子ども達やその親たちに出会う中で教育について改めて考えさせられた。私はキルギスで「教育」とは「何かを教えること」ではなく「ただいてくれるだけでいい」と伝えることではないかというひとつの気づきに出会えた。



そんな大事な大事な気づきをこの中央アジアの小国でほそぼそと暮らす人々に教えてもらった。

相変わらず毎日気温は零度を下回っている。しかし風には春のにおいがまざっている。誰もが雪が溶ける春を待っている。雪の下ではたくさんの芽が春が来るのを辛抱強く待っているようである。

だれよりも春を待っている寒さに弱い私は、今日も子ども達の家にお茶を飲みに行く。

(授業力高度化コース第4期生)